

ま え が き

1990年代のはじめにインドを取り巻く内外の環境は大きく変化した。1989年の冷戦の終結と、1991年のソ連の崩壊、そして、同年のインド自身による経済自由化への方向転換など、内外の激変に対処するため、インドは置かれた国際関係の再検討を行わざるを得なくなった。

1980年代までのインドは非同盟運動の旗は降ろしていなかったものの、グローバルなレベルでは冷戦構造の下、1971年にはソ連と同盟を結び、第3次印パ戦争で勝利しパキスタンを分裂に追い込んだことから、「リージョナル・パワー」として南アジア地域ではその地位を確立した。また、1950年代からの閉鎖的、社会主義的な経済体制もあって外部世界との大胆な交流を行う必要性も小さかった。このような、安定的な、ある意味では停滞的な国際関係のなかに自らを位置づけざるを得なかったのが、1980年代までのインドであったともいえよう。

そのような状況を見直さざるを得なくさせた大きな要因は、冷戦構造の崩壊であり、国内経済の停滞と、それゆえの政治的不安定性であった。経済体制の改革の必要性は1980年代から意識され、徐々に自由化へと転換していったが、自由化への動きとグローバルな国際関係の変動は互いに強めあって、その過程を加速した。その結果生じたもっとも大きな変化は、西側、特にアメリカとの関係強化であった。経済改革と西側との関係強化は、2000年代半ば以降の急速な経済成長のひとつの要因となった。

以上のような変化は結果的に、独立後インドが求めてやまない国際的威信の顕著な向上につながっているように見える。1998年の核実験の強行は、その直後の非難にもかかわらず、かえってインドの「実力」を印象づけるものとなった。また2001年の9.11同時多発テロと同年12月のインドで起こった国

会議事堂への襲撃テロ事件によって、南アジアから中東にかけての不安定な地域で、インドはイスラーム過激派のテロに対する同じ被害者として世界、とくに西側の理解をより明確に得られる国となったようにみえる。この一連の流れのひとつの帰結が、2008年の印米原子力協力協定の締結であり、これによって實際上、インドの核兵器保有は国際的に正統化された。

インドは今や世界から理解と評価を受け、国際的威信を急速に高めつつある国、すなわち大国化しつつある国なのである。これが多くの人がインドに抱くに至ったイメージではないであろうか。しかしながら、そのような漠然としたインドの大国化イメージは、インドの実態を的確に理解する上でどれほど有益なものとなり得るであろうか。そもそも今日の世界において、「大国化」のもつ意味が問われねばならないし、その上でインドが国際関係において向かいつつある方向性が探求されねばならないであろう。そのためにはインドを取り囲む国際関係を現実的に即して、改めて検討する作業が不可欠となる。本書はこのために編まれた論文集である。

インドは伝統的に南アジア域外にはアグレッシブに影響力を行使したことがない国である。このような国家が近い将来、南アジアを越えて強い影響力を発揮できる「大国」となるイメージは、少なくとも編者には今のところない。国の内外でさまざまな制約要因があるからである。しかし、インドの将来展望を語るには編者の能力はきわめて限られており、読者自身が批判的な眼をもつて的確なイメージをもっていただくことを願うだけである。本書がその一助になれば望外の幸いである。

最後に、本書は2009年から2010年度にかけて行われた研究会「現代インドの国際関係：メジャー・パワーへの模索」の成果である。研究会に参加していただいた委員、匿名レフリー、本書の編集・出版に携わっていただいた関係諸氏に謝意を表したい。

2011年 8月

編 者